かごしま医療過疎 ⑤

再生先進地からの報告

医師と住民の懸け橋

NPO「育てる会」

2005年1月、千葉県東金市であった行政主催の医療シンポジウム。意見交換会では住民から医療充実を訴える声が相次いだ。だが、行政や医療関係者は「医師確保に努力している。理解と協力を」と繰り返すだけで、論議がかみ合わない。会場にいた同市の主婦藤本晴枝さん(45)は「医療と住民の間にある溝は深い」と感じた。

藤本さんは同年12月、東金市を中心とした山武(さんむ)医療圏の住民と医療機関との懸け橋を目指そうと、知人らに呼び掛けて特定非営利活動法人(NPO法人)「地域医療を育てる会」(35人)を立ち上げた。

主婦や会社員らが月1回集まって知恵を出し合い、勉強会を開いたり、情報紙「クローバー」(A4判、2ページ)を発行したりして、医療界への要望や、住民は何をすべきかを訴えている。クローバーは、毎月1回発行。同市の全戸(約1万7000戸)のほか、公的施設などに計2万部配布している。

■□■

07年8月。同市の50代男性が自宅で倒れ、救急隊が受け入れ先を探したが、14カ所に断られ死亡した。その半年後、マスコミは一斉に「たらい回し」と報じた。

報道によると、各医療機関の拒否理由は「診察中」「医師不足」。地域の病院や医師への世論の風当たりが強まった。

発熱した子どもの病院探しに苦労するなど、母親として「医療過疎」を肌で感じていた藤本さんらは、医療機関が受け入れ拒否した理由を自分たちで調べ始めた。「現場の実態を知らずに医師を批判すれば、地域から医師はますます離れ、悪循環に陥る」との思いからだった。

東金市内全戸に配る情報紙「クローバー」。さまざまな視点で問題提起している

藤本さんは地域の2次救急を担う県立東金病院(同市)、国保成東病院(山武市)の医師を訪ねた。

当時、東金病院では、ウイルス感染による超重症の皮膚病や高血糖患者の緊急入院が相次いでいた。成東病院では、手術患者の処置中のほか、大腸がん患者や急患が数人搬送されていた。

1カ月後、クローバーに緊急リポートが掲載された。受け入れ拒否は、医師不足が招いた結果ではあるが①医師は懸命に治療にあたっていた②医師不足で24時間体制の救急医療が組めない―と、地域医療の現実を紹介。今頑張っている医師の負担軽減のために、軽症の場合は病院ではなく近くの診療所を訪れたり、できるだけ日中の受診をするよう呼び掛けた。

藤本さんはその後、市民から「熱が出てもすぐ病院に行かなくなった」との声を聞いた。市民の意識が変わり始めていると感じた。

■□■

地域医療問題に詳しい慶応大学総合政策学部の秋山美紀専任講師は「住民と医師が互いを理解し、相手の立場を考えた行動をとるようになると、地域医療は再生していく」と話す。

会の活動は5年目に入った。現在、国の「地域医療再生計画に係る有識者会議」に唯一の民間人として参加する藤本さんは「地域医療の充実にゴールはない。今後は行政を巻き込んだ活動を進めていく」と力を込めた。